ネイマールと子供の「美しい結末」

スポーツを考える

玉木正之

今年の漢字「戦」とW杯

サッカー・ワールドカップ（W杯）カタール大会は、メッシとエムバペの見事な対決の結果、アルゼンチンの勝利で閉幕した。日本代表は残念ながら目標のベスト8に惜しくも届かなかったが、グループリーグでドイツ、スペインの強豪チームを倒し、素晴らしい成長ぶりを見せた。

そんなW杯期間中、小生には少々気になることがあった。それは、毎年京都清水寺が発表する「今年の漢字」に、「戦」が選ばれたことだ。

今年はロシアのウクライナ侵攻、中国の台湾海峡での大規模な軍事演習、北朝鮮のミサイル連続発射など、「戦」の字が選ばれたことに納得せざるを得ない事情もあった。が、それを報じた新聞やテレビが、「今年はワールドカップも」と付け加えたことには違和感を覚えた。

確かにサッカーには「闘い」の要素がある。試合を勝ち進むための「戦略・戦術・戦法」も必要だ。が、サッカーは……いやスポーツは、断じて「戦争」とは異なり、むしろ正反対の「平和」の側に位置するものだということを忘れてはならない。

「競い合い」が本質

gamеやmatchは基本的に楽しんで行うもので、試合とは「試し合い」「試み合う」ことであって、「敵と戦う」ことではない。「仲間と一緒にスポーツを行う」のは、互いの技量を「競い合う」ことのはずだ。スポーツの仲間の存在が自分の技量を伸ばしてくれ、人間的にも成長できる。それがスポーツの本質だ。

ボクシングやレスリングなどの格闘技や、サッカーやラグビーなどの球戯では、相手を叩きのめしてやろうと意気込んで「戦いに挑む」選手もいるだろう。が、そのような選手もスポーツの試合に参加すれば、それが実は技術の競い合いで、「戦いに挑む」意欲だけでは勝てないことに気づくはずだ。そして試合後は叩きのめそうと意気込んで「戦った相手」と握手し、抱き合い、互いの技量を讃え合うことになるはずだ。

クーベルタン男爵が「オリンピック運動」を起こし、世界のすべての国々の人々がスポーツを「競い合う」ことで世界平和の実現を目指したのも、そのようなスポーツに備わった基本的性質―「戦い合う」のではなく「競い合う」ことで仲間（相手）をより深く理解し、仲良くなるという「スポーツの力」に気づいていたからに違いない。

その意味で今回のワールドカップで最も美しい場面が、クロアチア対ブラジルの準々決勝の試合後に出現した。延長1対1で決着がつかずPKで4対2とクロアチアが勝利した直後、敗れたブラジルのスーパースター・ネイマールは衆目も気にせず芝生の上で泣きじゃくった。

握手し、強く抱きしめ

そこへクロアチアのユニフォームを着た小さな子供が近寄り、ネイマールに手を伸ばした。傍にいた係員は子供を止めようとしたが、ネイマールはその子に近づき、握手し、強く抱きしめ、子供の優しい癒やしの行為を受け入れた。それは今回のワールドカップのあらゆるゴールよりも感動的で美しい一瞬だった。

その子はクロアチアの選手の子供だったらしいが、今年の漢字の「戦」にW杯も含むのなら、いま「戦争」をしたり、「戦い」の威嚇に走っている世界の政治的指導者たちにも、この「スポーツの戦いの美しい結末」を見習ってほしいものだ。

（たまき・まさゆき＝スポーツ文化評論家）

クロアチア戦に敗れた後、ペリシッチの息子（左）と握手をするブラジルのネイマール＝9日、アルラヤン（EPA時事）